１４９７（明応６ 越後下向（六）			近衛亭小月次連歌会		実隆筆「新撰菟玖波集」 校合	禁中連歌　加点 近衛政家・尚通に古今集 講釈
１４９８（明応７	源氏物語講釈　種玉庵	山何百韻（いかでかく 何船百韻（桐の葉に 何人百韻（吹き捨てよ 初何百韻（木がらしは 何木百韻（山は雪	（寺井知清主催 （香宗我部親秀 張行？ （相国寺 （南昌院宗棟長 老主催 （堀川　妙満寺	近衛亭　月次和漢会	自撰発句集『宇良葉』 本体部分成るか	近衛亭　古今集　講釈再開 近衛亭　古今集講釈　終了 近衛亭近衛尚通へ古今伝授 斎藤利綱　古今集　贈る 禁中連歌に加点 三条西亭　源氏物語　講釈 禁中連歌に加点 近衛亭　百人一首　講釈 近衛亭　詠歌大概　講釈 丸七郎殿御宿所あてに百人 一首抄　贈る 禁中庚申百韻連歌　合点 近衛亭　伊勢物語　講釈
１４９９（明応８	何人百韻（身や今年 種玉庵　張行 独吟何人百韻（限りさへ ＊門人遺戒百韻	何人百韻　（曙を 何人百韻（散るをみん 俳諧連歌言捨（夜うさ りは	能勢範則亭千句 （清水寺 千句連歌会（細川 政元主催 （一 近衛亭連歌会 三条西亭	近衛亭　月次和漢会 近衛亭　月次和漢会 近衛亭　月次和漢会	飛鳥井宋世へ送別和歌 古今集　　校合	近衛亭 和歌未来記　講釈 小倉実澄　新撰菟玖波集 新調本の加証奥書　判形
1500（明応9	発句（わきてみば　種玉庵	山何百韻（ほととぎす 何路百韻（まだきより 何船百韻（柳吹く 何人百韻（年に有りて 何人百韻（秋の色に	近衛亭歌仙連歌 （一 （近衛亭法楽連 歌会 （赤沢政定亭 （一 ＊各所で連歌会 （寺井知清主催	近衛亭　月次和漢会	河海抄抄出 花鳥余情抄出 宇良葉　成立 浅茅　成る	宗碩に譲渡 宗碩に譲渡 石井宗友の句集「下葉」に 奥書
越後下向（七） ＊ 種玉庵消失						
１５０１（明応１０ （文亀元 越後 滞在			越後　連歌会		下草　奥に署名 宗祇付句（老葉付載） 下草　奥に署名 「古今集聞書、切紙以 下相伝之儀」の箱	越後で宗碩に　古今集講釈 実隆　八代集の外題　染筆 肖柏　宗祇連歌付句に加点 実隆へ届く 越後国府　古今集講釈終了 宗碩　「十口抄」後に編集
１５０２（文亀２ 越後から帰る 武蔵 相模 箱根 駿河桃園　定輪寺	夢想発句にて連歌 （年やけさ　張行 連歌一折（青柳も　張行 三吟何衣百韻（手折るな と　伊香保三吟　張行 ながむる月に立ちぞうかるる	（箱根湯元宿所 宗祇追悼百韻　張行 （消し世の朝露分る山 路かな　宗長）	武蔵上戸　千句連 歌会（山内上杉） 相模 上田館　千句 連歌会 （定輪寺		老葉百句抄 再編老葉 改修本の成立	門弟某　万葉抄（宗祇抄） 書写か 北信濃の高梨政直へ贈呈か 古今和歌集聞書（文亀二年 宗祇注）（宗坡?）加証奥書 素純に古今伝授？ 宗長　「宗祇終焉記」

年譜不記載の連歌

（江藤保定「宗祇の研究」）より

○年代不明連歌
五二　独吟百韻（かすみかは　専順
五三　何椿百韻（風きよし　他阿
五四　要文（雲となりし
五五　百韻（たれを世の
五六　何人（初花や
五七　何船（花そ青葉
五八　何人（春ふかし　美濃連歌
五九　何木（雲の折　心敬　→応仁２に
六〇　畳字俳諧（花にほふ　宗祇独吟
＊二九　延徳元　何路両吟連歌（さみだれは宗元
＊両角記載せず
三八　明応３　薄何（山吹を　→文明１３に

○割愛された連歌（年次不詳連歌）
名所千句（下とくる
朝何独吟百韻（おもかげに
初何百韻（撫子の
独吟百韻（春や立つ
和漢百韻（雲は花　文明１０（雪は花　？
淀渡百韻（嵐にも
＊文明７に何山百韻（夜半にゆく＊両角記載せず

注ｉ　両角倉一「宗祇年譜」（「宗祇連歌の研究」所収）による。　行書体は両角稿には記載されていない
注ｉｉ　後日、両角倉一「連歌師宗祇の伝記的研究」所収の「宗祇詳細年譜」で追加した事項もある。
注ｉｉｉ奥田勲「宗祇」所収の略年譜と対照し、追加した事項もある。　2024/04/07　金窪明美

参考：『古今集』について、片桐洋一は、古今集の「表現と歌風」について、以下のように説いている。

「『古今集』の和歌は、盛りを待ち望む心、衰え移ろいゆくのを惜しむ心を「見るもの、聞くものに託けて」抒情したものであって、「見るもの、聞くもの」を、その在るがままに写生する類の歌でないことはあまりにもあきらかなのである。」

「『古今集』の和歌の真の姿は、「うつろひゆく」を惜しみ、「我が身世にふる」はかなさを歎く抒情の文学以外の何物でもないと思うゆえんである。」　（「古今和歌集」解説）

また、
「『古今集』四季歌の部立・配列が、暦に表れる時間的推移に従っているだけではなく、冬の部が再び春一月につながってゆくというように、まさしく自然の〃うつろひ〃のそのまま依拠した循環的ともいえる構成をとっているという理解にもなるのである。」

「恋一・恋二・恋三の始めの方は「忍ぶ恋」「まだ見ぬ恋」「人に知られぬ恋」「夢に見る恋」「逢はずに帰る恋」など、いわば「待つ恋」をテーマにした歌ばかりが配列され、恋三の終わりの方から恋四・恋五にかけては「人目をつつむ恋」「心変りを恨む恋」「あかず別れるる恋」昔を偲ぶ恋」「厭はるる身を歎く恋」「わびはつる恋」「過ぎにし恋」などで占められている事実と一致している。」

「『古今集』の和歌は、対象そのものを詠むのではなく、対象に寄せるみずからの切々たる心を詠むものである以上、自然を詠んだ四季の歌と、人事を詠んだ恋の歌が、その方法において同じものがあったとしても不思議ではないのである。」　（「古今集的表現とその周辺」（「王朝和歌の世界」所収））